

プーシキン 「エウゲーニイ・オネーギン」から 木村彰一訳 河出書房新社

ある私信の一節：

彼は虚栄心に満ち溢れ、その上さらに、よき行いも悪しき行いも同様な無関心さを持って告白するという、特殊な傲慢さを身に着けていました。優越感の、しかもおそらくは架空の優越感の、これは結果なのです。

第1章：生きることに気ぜわしく、恋をするにも大急ぎ

エウゲーニイは18歳。

流行会の模範生徒がいろんな服を着たり脱いだりまた着たりする…

身なりのことでは大の凝りやで、洒落もの。鏡の前で少なくとも3時間。

社交界の寵児？上流社会の空騒ぎにも愛想が尽きた。美女たちに絶えず心を労することも、不義の恋にも飽き果てた。彼は憂いに閉ざされていた。

父親の死、父親に負債。叔父が亡くなって、その莫大な遺産を相続する。ここから田舎暮らしが始まる。

第2章 おお田園よ

エウゲーニイが退屈な日々を過ごしていた村は風光明媚な土地だった。

周りの地主との付き合いを嫌っていた。

ちょうどそのころ、新顔の地主がやってきた。ヴラジミール・レンスキイ。カントをあがめる詩人。恋の道にはうぶな素人。でも金持ちで、美男。

エウゲーニイとヴラジミールは、親しくなり、親友となった。

(人間は徒然をまぎらすために友となる)

ヴラジミールは恋をしていた。その相手はオリガ。

ここで、ラーリン家の姉妹の紹介。姉はタチャーナ。妹はオリガ。

タチャーナは華やかさのない娘。

第3章 彼女は乙女であった。彼女は恋をしていた。

二人はラーリン邸を訪れた。帰りの馬車の中での会話。

ねえ、タチヤーナはどっちだい？憂鬱そうに窓際に腰掛けた娘だよ。ほんとに君は妹娘にほれているのかい？どうしてさ？僕なら姉を選ぶだろうよ。

エウゲーニイの来訪で、タチヤーナは恋する身となった。

第3章17節からが、オペラの手紙の場面。ばあやとの会話。ばあやを去らせて、手紙を書く。手紙はフランス語で書かれた。彼女はロシア語をよく知らず、雑誌も読んでいなかったから、自分の国語で、思いを表すことが出来なかった。

第3章38節からはエウゲーニイとタチヤーナの場面
結論は後で。

第4章 モラルは毒物の本性の中にある。

エウゲーニイとタチヤーナの場面。手紙への返事。

タチヤーナの名の日：洗礼名と同じ名の聖人の記念日。聖タチヤーナの記念日は1月12日。

第5章 おおスヴェトラナ、怖ろしきこの夢どもを知ることなかれ！

第5章25節から、タチヤーナの名の日のパーティ。ムッシュー・トリケは小唄をポケットに忍ばせてきた。

第6章 かなた、霧深い短い日々の下、死を苦痛とせざる人の子は生まれる。

第6章21節は決闘の場面で歌われる、「どこへ、ああどこへ去ったのかわが青春の黄金の日々よ。